



細谷俊夫

—戦後教育学界の権威—

白梅学園短期大学教授 師岡 章

はじめに

細谷俊夫は白梅学園短期大学において、1975(昭和50)年1月から1983(昭和58)年3月までの8年3ヶ月、3期にわたり、第5代学長を務めた人である。今日まで10代にわたる歴代の学長の中で、その在任期間は第8代学長である石井哲夫の9年間に次いで、2番目の長さである。筆者が在学していた当時の学長という縁もあり、僭越ではあるが、その歩み、また業績について、紙幅が許す中で紹

介したいと思う。

生い立ち

1970(昭和45)年、還暦記念として出版された『牛歩38年』(細谷俊夫先生還暦記念会発行)によれば、細谷は、1909(明治42)年8月29日、東京府北多摩郡清瀬村字下宿(現清瀬市)にて、父細谷代助、母ヒテの長男として生まれた。ちょうど、伊藤博文がハルビン駅頭で暗殺された年である。父は小学校教員であり、その関係もあつてか、

1916(大正5)年、7歳の時に、東京府豊多摩郡渋谷町下渋谷(現渋谷区)へ。そして、1921(大正10)年、12歳の時に、東京府北豊島郡西巢鴨町池袋(現豊島区)に転居している。小学校も、当初、東京府豊多摩郡渋谷町立長谷戸尋常小学校に入学するが、6年次に東京府北豊島郡西巢鴨第二尋常小学校に転校する。なお、この西巢鴨第二尋常小学校では、細谷自身が「生涯の師、長谷川駒吉先生の薫陶を受ける」(『牛歩38年』273頁)と述べる出会いがあった。この長谷川は、後述するように、大学卒業後、社会人として初めて勤務した小学校の校長でもあった。おそらく、それは偶然ではなかったろう。細谷が教育を志した背景には、父の影響とともに、長谷川の影響が大きかったと思われる。その後、1922(大正11)年、13歳で東京府立第六中学校(現都立新宿高校)に入学。1926(大正15)年、17歳で、官立の旧制浦和高等学校文科(戦後、埼玉大学に包括)に入学した。そして、1929(昭和4)年、20歳で東京帝国大学文学部教育学科に入学し、本格的に教育学を学ぶこととなった。

教育現場の世界へ

東京帝国大学在学中であった1931(昭和6)年、細谷は「明治時代における我国の郷土地理教育」と題した初の論

稿を『教育思潮研究』第5巻第3集に発表している。また、同大学を23歳で卒業した1932(昭和7)年には、「教育と環境の問題」をテーマに取り組んだ卒業論文を加筆し、主任教授吉田熊次の世話の下、初の著作となる『教育環境学』を目黒書店から出版している。なお、卒業する年の1月には第一次上海事変が起こっており、社会はすでに重苦しい空気に包まれていた。こうした中、細谷は卒業論文のテーマ設定について、「人間と環境とが相互に規定しあう関係について、自分なりの考え方をもちことを迫っていた当時の緊迫した環境が、無意識的にそうさせたのかも知れない」(前掲書、254頁)と回想している。細谷は、その後の研究活動において、時宜にかなった教育問題にコミットしていくが、その一端が垣間見えるエピソードと云えよう。このように、若き頃より、教育学研究に対し、類い稀なる才能を有していたことがわかる。

ただ、大学卒業直後、最初に得た職は、東京府豊多摩郡淀橋第四尋常小学校(現新宿区立淀橋第四小学校)の代用教員であった。細谷によれば、「東京といっても当時はまだ郡部で、ごみごみした小住宅や零細工場が立ち並んでいる場末の学校だった。したがって職員の構成なども決してよいとはいえず、『尋正』とよぶ一段格の低い先生が多かった」(前掲書、259頁)ような小学校であった。ちなみ

に、「尋正」（一般には「尋本正」と呼ばれる）とは、小学校の本科正教員（いわゆる「小本正」）よりも一段階劣る尋常小学校の本科正教員の資格のことである。高等小学校の教員にもなれる「小本正」の有資格者の大半は師範学校本科の卒業者であったが、尋常科のみしか担当できない「尋本正」の場合、師範学校の簡易科卒や教員の検定試験の合格者が大半であった。

こうした、必ずしも恵まれている職場とは言い難い尋常小学校に帝大卒の細谷が着任したのは、前述した通り、小学校時代からの恩師、長谷川が同校の校長をしていたからであろう。細谷は、1933（昭和8）年から同小学校の訓導となり、翌1934（昭和9）年まで勤務したが、その中で、熱心に教育実践とその研究に従事した。特に、研究活動については、長谷川が「小学校教員」としてまともな資格をもっていなかった筆者には、東京市が考案した算数と国語の教育測定を手懸かりに、学習指導の研究を命じた」（前掲書、259頁）ことが刺激となったようである。細谷は、これらのテーマを同僚教員とともに共同で研究し、それぞれ「算術科学習指導根本問題の吟味」「読方科学習指導の検討」と題して資料にまとめ、公開研究会時に発表した。それらは、細谷自身が「いずれもその当時の職員一同が精魂こめた実践の記録である」（前掲書、260頁）と述べるよ

うに、実践の事実に基づき、実践の改善に資する研究であった。教育学の中でも、実践に直結する教育方法に関心をもち続けた細谷の原点となった研究成果とも言えよう。

本格的な学生生活への転進

1935（昭和10）年、細谷は愛知県岡崎師範学校（戦後、愛知教育大学に包括）の講師となり、岡崎市に移る。そして、翌年には、東京帝国大学の助手となり、東京に戻る。同時に、日本大学、千代田女子専門学校（現武蔵野女子大学）の講師も兼ねる。小学校教員から大学教員に転進し、本格的に教育学研究に打ち込むことになったわけである。

この頃から、ドイツの産業教育学に関心を抱き、1937（昭和12）年には、『職業教育』5月号に「ドイツにおける実科学校の誕生」、同6月号に「ペスタロッチとフエレンベルク」を発表。続いて、1938（昭和13）年には、『教育』12月号に「経済政策の文化的側面―ドイツの第二次四ヶ年計画と学校教育」、そして、1939（昭和14）年には『教育学論叢』（吉田熊次先生記念論文集）に「第十八世紀に於けるドイツの実業教育」など、精力的に論稿を発表している。

また、東京帝国大学の助手となった1936（昭和11）年4月には、同大学の教授であり、当時、教育学界の重鎮で

あった入沢宗寿の長女伊都子と結婚。東京市豊島区池袋にて、両親と同居し、新婚生活を始める。時に27歳であった。そして、1937(昭和12)年には長女泰子、1938(昭和13)年には次女邦子が生まれている。なお、細谷は子宝に恵まれ、1940(昭和15)年に三女典子、1943(昭和18)年に四女克子、1947(昭和22)年に長男俊造と五女明子、1949(昭和24)年に六女芳子と、一男六女をもうけた。

1940(昭和15)年、31歳で細谷は東京帝国大学文学部の講師となり、「学級論」の講義と「技術教育」の演習を担当する。翌1941(昭和16)年には、東京女子大学の講師を兼務するとともに、日本出版文化協会文化局の嘱託となり、児童の読書調査なども行っている。1944(昭和19)年には、2冊目の単著となる『技術教育』を目黒書店から出版した。また、東京帝国大学の講師となった1940(昭和15)年には、両親の家からも独立し、豊島区長崎3丁目に転居している。公私ともに本格的に自立した時期と言えよう。

戦時下の生活

しかし、順風満帆に見えた生活も、戦争の激化にともない、様々な試練に出会うこととなる。1944(昭和19)年には、家族を埼玉県入間郡三芳村(現三芳町)の実父の実家に疎開させた。3ヶ月ほどでいったん引き上げさせ、板橋

区大谷口町にて同居するが、同年3月には激化する空襲を避けるため、再び家族を鳥取県日野郡日野上村(現日南町)にある親戚の家に疎開させざるを得なかった。さらに、同年5月には、実父、及び義父を立て続けに病気にて亡くしてしまう。妻や幼いわが子と離れて暮らす寂しさ、そして父の死と、度重なる哀しき出来事に、さぞ心を痛めたことだろう。

また、この間の研究活動も、1942(昭和17)年頃から工業青年教育研究会のメンバーとなり、工業青年の教育問題にかかわるなど、戦時色の強いものとなっていた。ちなみに工業青年教育研究会は、1942(昭和17)年に『徴用工員の教育問題』を刊行するなど、国家総動員法に基づく国民徴用令によつて始まった徴用制度(国民を軍需産業に労働力として動員する制度)遂行の一翼を担うものとなっていた。こうした中、1944(昭和19)年には上村福幸東京帝大教授をチーフとする勤労管理教育の研究にも参画し、空襲下を長崎造船、三池炭鉱、八幡製鉄などの調査も行っている。

新教育時代の活動

終戦後の1946(昭和21)年、細谷は、前年4月に全国4番目の官立高等師範学校として設立された岡崎高師(戦

後、名古屋大学に包括)の講師となった。同年4月に実母が病死したこともあり、鳥取から家族を、そして東京から弟卓郎(東大農学部学生)と妹和子(東京女子大学生)を呼び寄せ、愛知県豊川市牛久保町に転居した。ただ、残念ながら、同年12月には弟卓郎を、1949(昭和24)年3月には妹和子をそれぞれ病気で亡くしている。

しかし、時代はそうした哀しみに浸る間もないほど、大きな変化を示していた。特に教育界では、戦前の教育が全面否定され、民主主義の名のもと、新しい教育運動が巻き起こっていた。1946(昭和21)年の年末には岡崎高師の教授となっていた細谷も、そうした新たな息吹に応えようと、愛知県下の多くの学校を巡り、新教育に関する講演を行ったという。また、1948(昭和23)年、戦後の学制改革にともない、岡崎高師にも大学建設部が設けられた。この新制度への移行の労も、細谷が担うこととなった。そして、1949(昭和24)年、国立学校設置法の制定にともない、名古屋大学が新制大学として改組された際には、細谷の尽力もあり、教育学部が創設された。同年、40歳となった細谷も教育学部の教授となり、「教育原論」や「教育史」を担当した。1950(昭和25)年、教育学部に一挙に8講座が新設された際には、依田新、重松鷹泰と共に、人事に奔走したともいう。

こうした中、1947(昭和22)年には、七里公章らと共に編成『新教育の設計』を新教育研究会から刊行し、その中で細谷は「社会科教育論」を担当した。また、1952(昭和27)年には3冊目となる単著『近代社会の教育』と、青木誠四郎、宗像誠也との共編で『教育科学辞典』を朝倉書店から刊行するなど、精力的に新教育に呼応した論稿も発表した。

教育学界の中心へ

名古屋大学教育学部が正式に授業を開始した翌1952(昭和27)年、43歳で細谷は東京大学教育学部に転任し、教授として「教育方法」を担当することとなった。当初、文京区向丘弥生町(現弥生町)の義母宅に同居していたが、1953(昭和28)年に北多摩郡久留米村(現東久留米市)に住宅を新築し、転居した。

東京大学転任後は、学内外にわたって目覚ましい活躍を見せる。まず、学内においては、1955(昭和30)年から1958(昭和33)年まで、教育学部附属中・高校長。1959(昭和34)年から1961(昭和36)年まで、教育学部長。また、東京大学評議員も1963(昭和38)年から1966(昭和41)年、1967(昭和42)の計3期務めた。こうした功績により、1970(昭和45)年、61歳で定年退職した後は、名誉教授の称号を得ている。

次に、学外においては、1954(昭和29)年、文部省の教育課程審議会の委員就任を皮切りに、断続的に同審議会の委員を務め、小・中・高の教育課程の改訂に参加した。1958(昭和33)年には、同省の中学校技術・家庭科小委員会委員長として、新設された技術科の指導要領作成に携わる。また、1961(昭和36)年から1963(昭和38)年まで、同省の教育職員養成審議会の委員としても活躍した。さらに、1960(昭和35)年には、経済企画庁の経済審議会専門委員として『経済発展における人的能力開発の課題と対策』の答申作成などにもかかわっている。一方、民間レベルでは1953(昭和28)年から、朝日新聞社が主催する健康優良学校児童表彰会の中央審査委員を務めた。学会活動についても精力的に取り組み、1958(昭和33)年には、大嶋三男、上滝孝治郎、宮田丈夫、宮坂哲文らと教育経営学会、また1959(昭和34)年には、桐原葆見と共に日本産業教育学会をそれぞれ創設している。日本教育学会においても、1959(昭和34)年から1963(昭和38)年までの4年2期にわたり、初代の事務局長を務めた後、1979(昭和54)年からは2年間にわたり、会長不在のもと会長代理、会長代行職も務めた。

このように、東京大学転任後は、まさに教育界の中央にて活動し、もてる力を存分に発揮しつつ、教育界発展の一

翼を担ったのである。東京大学を定年退職した1970(昭和45)年には、立教大学文学部に転任。そして、冒頭に記したように、その5年後には、本学短期大学の学長となつたわけである。

学長退任後は、埼玉県入間郡名栗村下名栗(現飯能市)に新居を設け、転居。そして、2005(平成17)年5月16日に95歳で世を去ることとなる。

教育学研究の功績

細谷は、1960(昭和35)年、岩波書店から4冊目の単著となる『教育方法』を刊行した。1969(昭和44)年には、研究の進展、特に教授メディアの問題を書き加えて第二版(現在は第四版まで改訂)を刊行したが、同書の著書紹介の欄には、自身の専攻として教育方法と産業教育の二つがあげられている。

このうち、本学とも関連が深い教育方法について、その業績を概観してみると、第一は、逸早く教育方法に注目し、研究的な枠組みを整理したことである。例えば、前述した『教育方法』において、「学校教育に関するかぎりの技術的な問題を一括して、教育方法と呼ぶ」(V頁)と明確に定義づけた上で、「その中心的地位を占めるものが教授ないし学習指導であることは、学校教育の実態から見て当然

なことである」(V頁)と述べている。こうした枠組みの提示が、その後の教育方法研究の方向性を定めることとなった。1964(昭和39)年には日本教育方法学会も設立されるが、細谷の提示は、まさに、その先駆けとなったのである。

第二は、旧ソ連や旧東ドイツ、ポーランドなどの東欧諸国の教授論を積極的に学ぶことを説いたことである。代表的なものは、1959(昭和34)年、大橋靖夫との共訳で明治図書から刊行した『オコン教授過程』である。もちろん、それ以前から雑誌上では、しばしばオコンの教授過程論など、東欧の新しい理論は紹介していた。例えば、1957(昭和32)年、雑誌『教育』(第57巻第8号)に発表した「教授法の系譜」では、東独の新教育が子どもの自己活動を重視する中、教授の言語主義、記憶主義を批判的に検討した上で、その自己活動を子どもの自由意志に任せることなく、丁寧な計画に基づく、明確な目的を意識した教授の中で生かすことを強調していることを紹介している。その後、1968(昭和43)年には、全国授業研究協議会の砂沢喜代治、大橋靖夫、小川太郎と協力し、ポーランドからオコン教授を招き、各地で講演も実施した。こうした試みについて、船山謙次も『続 戦後日本教育論争史』(東洋館出版社、1960)において「日本の教授学研究に大きな貢献をもたらすものといわねばならない」(415頁)と高く評価している。

ただ、細谷の教育方法学は教授論の域を出ない面もある。それは、当時の学問状況から見れば致し方ないものである。今後、本学も、細谷が残した研究成果を踏まえつつ、「授業研究」あるいは「実践研究」という視点や、新たな研究方法を積極的に採用し、実践に寄与する教育方法の研究を展開しなければならないと思う。

白梅とのかかわり

『樋口愛子先生追悼録』に掲載された「回想」によれば、細谷は1966(昭和41)年、短大の教養科設置の実地審査のため、文部省の大学設置審議会の専門委員として本学を訪問したのが初めての接点であると述べている(14頁)。当時の樋口愛子学長とも、その時が初対面であったが、流暢な話しぶりに好印象をもったようだ。おそらく、樋口も細谷に敬愛の念を抱いたのであろう。両者が良好な関係を築いていたことは、その後、教養科の2期生として細谷の六女芳子が入学したことから分かる。

そのため、樋口が倒れ、後任を探していた際に、真っ先に名前があがったのも細谷であった。後に理事長となり、当時、学長人選の先頭に立っていた鈴木三男吉によれば、樋口の病中、すでに細谷を理事として迎えることは了解されていたが、1974(昭和49)年10月、樋口の逝去にともない、

学長職を打診することになったという。鈴木の熱心な説得もあり、翌11月に、細谷は「立教大学の任期もあり、1月から3月までは兼務というかたちでよければ」と快諾した。

学長就任後は、学生増と新校舎（E棟）の竣工、白梅保育園の設立、短大二十五周年記念事業の推進等を手がけ、短大の改革・発展に貢献された。このうち、白梅保育園の設立に際しては、初代の理事長も務めた。なお、鈴木によれば、同園を運営する社会福祉法人の名称が、学園創設者の家名を入れた「小松福祉会」となったのは、細谷の主張が大きく影響したそうである。こうしたエピソードからもわかるように、細谷は、本学園の歴史を尊重する中で大学運営を進めた。また、理事・教員・学生の代表による三者懇談会の発足にも理解を示した。その姿勢は、恩師である長谷川校長が体現した平等な学校運営と重なるものであり、かつまた、本学の建学の精神でもあるヒューマニズムとも相通するものである。本学にとつても誇りとして、語り継がねばならない人物であろう。

謝辞：本稿を執筆するにあたり、当時を知る本学園の教

職員の方々から様々な情報をいただいた。特に、

鈴木三男吉元理事長からは、当時の貴重な話を聞

くことが出来た。深謝申し上げる。

〔参考文献〕

- ・木原健太郎『キーワードでつづる戦後授業研究論争史』明治図書、1992
- ・佐藤学『教育方法学』岩波書店、1996
- ・『白梅学園短期大学創立二五周年記念誌』、1982
- ・『白梅学園短期大学創立五十周年記念誌』、2009
- ・『樋口愛子先生追悼録』、1977
- ・船山謙次『続 戦後日本教育論争史』東洋館出版社、1960
- ・細谷俊夫『牛歩38年』学術社、1970
- ・細谷俊夫『教育方法（第四版）』岩波書店、1991
- ・『細谷俊夫教育学選集』（全5巻）教育出版、1985